**＝前回までのあらすじ＝**

「言弾遣いとは、言葉に宿る力、つまり言霊を銃弾に込め、戦う者の総称である。ここ、ラングアゲでは…」

「はいはいストーップ！」「葬屋ストーップ！」

「何だよ、横から突然でてくるんじゃねぇよ、音斬のトンチキツインズ！！」

「律儀にあらすじしようとしてる所悪いけど、」「ぶっちゃけ、コレ、必要なくねぇ？」

「だってコレ載ってるの個人誌だぜ！？」「あらすじも何もねぇじゃん！！」

「ほらぁ！　俺天才！　パネェ！」「だろ？　俺頭いい！　ヤベェ！！」

「「というわけで、このページは俺達のワンマンライブにします！」」

「調子のんなッ！」

「ふざけんなッ！」

「そもそもサイレントな物語の中で歌おうってのが間違ってんだよ！」

「何の話だ？」「俺達はフルボイスの世界で生きてるぞ？」

「大人の事情だよ！　つか、分かってんだろとボケんなこのトンチキツインズ！！」

『そうだぞ。ぶっちゃけお前らのハッチャケトークはもうマンネリなんだよ。世間はなぁ、俺みたいなセンスあるフリートークを求めてるわけよ』

「というわけで、このページは兄さんのギヒャッ！？」

「手前らはいちいち出て来過ぎなんだよ！」

「敵キャラだったのに影の薄い琴樹に謝れ！」

「影が薄いって誰のこと言ってやがるんですか、糞言弾遣いさん？」

「「うわぁああ！？　琴樹ィイッ？！！」」

「そうだよ琴樹さんだよ！　あらすじに一回も出れてない琴樹だよ！！！　あんたらはいいよなァ散々本編で目立った揚句、粗筋にまで出ばってよォ！　こちとら粗筋に呼ばれないわ存在をスルーされるわ散々なんだよ！　一回代われ！　むしろ死ね！」

「お前、ありのままの自分さらけ出し過ぎだから！　叫び過ぎだから！」

「だってぇ…葬屋さん達が…ひっく、…あらすじに呼んでくれないから…ッ！」

「偽りの自分演じすぎだから！　その手は通用しないから！」

「そうです！　それに、死ねとか簡単に言っちゃいけないんで…」

「何お前チビの癖に、死ね」

「だからああああああああああッ！」

「なぁなぁ！　それより」「あれやろうぜ！！」

「「くさい台詞しりとり！」」

『えー、あんな恥ずかしいことやんのかよ？』

「恥ずかしいのは葬屋さん達で充…ってギャアア颯火さん撃たないで止めてぇえ！」

「ね！　ことのんもやりたいよなっ！？」「面白そうだよな！」

「そうだな、やるかやらないかは別として勝てる自信はあるよ」

「負の感情の塊、頼野琴樹が…！？」

「自意識過剰もここに極まれりだな」

「言ってろ、ヘボ言弾遣い。僕は、リンへの愛の言葉ならいくらでも出て来るからね、臭い言葉のボキャブラリなら負けないよ？」

「はいはい、らぶらぶ幼なじみは引っ込んでろ！　厭味は間に合ってるんだよ！」

「厭味？　っはっは、いや、僕あんたらのこととかどーでもいいし？　寝ても覚めてもリンのことしか考えてないし」

『…おまえ、ゼペットと気が合うかもなァ』

「じゃあ、しりとり開始ー！」「しりとりの《り》からー！」

「手前らは空気読めよッ！」

**「「『リ』ズムに乗ってダダダダンシ『ン』！」」**

「聞けし！」

「終わってるし！」
「はじめからクライマックスだな」
『カオスとはこのことだな』
「というか、モノローグのないあらすじに、この人数はきついと思うんですけど」
「じゃあお前が消えろよ」
「琴樹さんの笑顔が真っ黒で眩しいッ！」

「ハッ、お前達相変わらずためにも金にもならない無駄話ばかりしているようだな！　よし、この私が馬も耳を傾けるようなありがたい話をして…、え？　何、私か？　私は今作の新キャラ…、え？　出れない？　今回で最終回だろう？　私達出れないのか、あらすじ？　そんなのってチキショウ！　悔しくなんてないわあああいッ！」

《以下、尺の関係でカット》

という馬鹿野郎が馬鹿みたいに馬鹿騒ぎする馬鹿話もこれでお終い！？
ＧＡＮ×ＧＡＮ☆ＢＡＮ×ＧＢＡＮＧ言葉遊び系ハイテンションガンアクション
通学路、最後の関門！　帰るのは学校か、タームか！　それとも土か！
言弾シリーズ　最終回

# 黙れ！

次回からこの時間は終日さんの暗殺講座をお届けします

И

「もう、何を考えてあんな街中で撃ち合いをしようと思うのよ！　君達一体何歳？！」
「「青二才です」」
「上手いこと言っても許しません！」
ニアラの治安維持軍停留所、所謂交番に真新しいブレザーと学ランに身を包んだ学生が二人、軍のお姉さんに怒られていた。無論、主人公、弔祇葬屋と悼颯火である。
最近奇人変人に囲まれていたため、その場を乗り切ることに必死だった二人は、無意識のうちに仲良し幼なじみパワーを発揮していたわけだが、忘れてはいけない、この二人はどうやって校舎を破壊してしまったのかを。
「おい、颯火、お前が発端だろ。さっさと謝れ」
「はぁ！？　冗談は顔だけにしてくれよ、葬屋」
「ケンカ売ってんのかァ？！」
「第二ラウンド？　上等だ！」
「死ね！　へっぽこガンナー！」
「去ね！　超無能スナイパー！」
「もう！　いい加減にして下さいッ！！」
銃口突き付け合う迷惑学生二人。お前達の辞書にＴＰＯという文字は無いのか。
「もうあなた達に話しても無駄なことはよーっく分かりました！　親御さんに連絡させてもらいます！　名前は！？」
と、バンと机を叩いてお姉さんが言った途端、二人の顔は面白いほど蒼くなった。
これが顔面蒼白です。テストにでますよ。
「（え、ちょっと葬屋、ここって治安維持軍の主張所だよな？！　まずくない…？）」
「（名乗ったらお終いだぞ、颯火…！　蜂の巣コース決定だ！）」
説明しよう、問題児として有名な葬屋と颯火の父親は、二人とも大陸全体の悪言討

伐を担う組織、治安維持軍のトップクラスな隊長なのである（詳しくは言弾シリーズ番外編、双死双哀を読んでネ☆　ボイス・音斬雷人）。つまり、維持軍と繋がっている停留所で名前を明かすということは、身の上がバレる→父親にバレる→扱かれる、の至極明快なごーとぅへるなフルコースが描かれるわけであった。

二人が関わりたく無い物、双子異魂阿部親父。

「何をこそこそしてるんですか。さっさと学生証だす！」

「断固拒否！」

「絶対無理！」

必死な顔で即答。名乗るほどのものではありません、とぶんぶん首を振る。

二人にとっては死活問題なのだ。自業自得だが。

「あ、あのね、軍に逆らうと後々…」

とはいえ、お姉さんの勘忍袋もそろそろ限界であり、青筋立てながら腰の銃に手を延ばしかけている。維持軍のお姉さんだ、それはもう西部のガンマン顔負けの素晴らしい銃捌きを見せてくれるに違いない。見たくないけど。

今殺られるか、後で殺られるか。究極の二択。

二人は青い顔を見合わせて、

「逃げるぞ、颯火！」

「オーケイ、葬屋！」

・たたかう　・あやまる　**・にげる**

全力でその場から逃走！　命は一人に一つずつ。大切にしよう。

しかし、突如扉が外側から開き、二人は勢いよく顔から扉に突進した。

**ドガ、**

鈍い音がして、二人は同時にノックダウンした。

……、

沈黙。

嗚呼、こいつら馬鹿だ。

「……、」

倒れ伏す馬鹿×２を無言で見下ろすのは、時代錯誤な和装の少年。扉を開けた張本人である。死んだ魚のような目には同情の色は見えない。道端に落ちてるミミズの死骸を眺めているソレと同じだ。

そんな沈黙和装少年に、お姉さんがおずおずと聞く。

「な、何かご用ですか…？」

「……、」

「えっと……」

「ああ、突然すまないな。失礼するぞ」

と、その後ろから、同じく和装の少女が現れた。少女は、我が物顔で停留所に乗り込むと、間抜けな顔で大の字になっている葬屋と颯火をまじまじと見て『ふむ、当たりだな』と大きく頷いた。

お姉さんが困惑顔で説明を欲しているのに気付く様子はない。

「鶯、貴奴らを叩き起こせ」

鶯と呼ばれた少年は、相変わらず無言のまま横たわる葬屋達を揺すり起こす。

「ン…？　なんだぁ？」

「弔祇葬屋に悼颯火だな？　私は柏皐月（かしわさつき）。こいつは澄田鶯（ずんだうぐいす）。タームから来た者だ」

少女はまだ状況の飲み込めていない二人に、満面の笑みを湛えながら言った。

「第六言弾専門学校校舎破壊と相次ぐ器物破損により、貴様らをタームへ連行する」

……ああ、ついに…

じゃないよ！　えええええッ！　ターム行き！？
「…颯火ァ！」「葬屋ァ！」
「《逃げろ》ッ！」」
ダァン
互いに突き付けあった銃口から同時に銃声があがり、次の瞬間、葬屋と颯火の姿は消えていた。
「ち、逃げられたか。まぁいい、予想範囲内だ。鴬、行くぞ。失礼した」
和装の二人、皐月と鴬はそう言って何事も無かったかのように停留所を去っていってしまった。停留所にはポカンとしたお姉さんだけが残された。

そうして、言弾シリーズの最終章は始まったのだ。
この時は誰も、あんな悲劇が起こることになろうとは、知るよしもなかった…

И

「ど、どうなってんだよこれェエ！？」
「知るかよ！　ただ、捕まったらハッチャケ野郎の仲間入りってことは確かだなぁ！」
停留所からテレポートでどうにか逃げ出した二人は、ニアラの街をひた走っていた。
そして、その二人の後方には人ほどの大きさの紙人形。逃げる二人を追うように、『捕縛』と書かれた巨大な紙切れが葬屋達目指して、ニアラの街を高速で飛んでいる。
「まったく、タームの奴らはどうしてこう、変な言霊の使い方するんだか！」
「そうじゃなきゃ、タームになんかいねぇだろ！」
悪態をつきながら路地に入り、角を曲がり、どんなに撒こうとしても、むしろ待ち構えていたかのように次から次へと紙人形が現れてきて、まるで埒があかない。
だが、ここで言弾を使うために発砲でもしようものなら、皐月や鴬に居場所を伝えるようなものである。
「あーッ！　サイレンサー買っておくんだった！」
「言弾が使えないなんて、俺たち言霊の勉強なんてしてな…」
頭をかかえる颯火に、葬屋がそこまで言うと、二人はハタと手をうった。
「言霊だ！」
「それだ！」
言うが早いか、二人は一斉に振り返り、叫んだ。
「俺達はやれるやれる二人ならやれる倒せる倒せる戦える！」
「紙人形くらい倒せる倒せるいけるいけるやれる戦える！！」
「そうだろ、颯火！」
「そうとも、葬屋！」
「俺達ならなんだってできる！」
「俺達の本気、見せてやるぜ！」
そして、迫り来る紙人形に向かって、同時に力強く蹴りを放つと、一瞬で紙人形を粉砕した。そのまま飛び上がり、紙人形を勢いのまま蹴倒していく。
《自己暗示》。言霊で自らに暗示をかける、という二人が唯一支える言霊である。
これなら、言弾を使わずに紙人形を倒すことが出来る！
「倒せる倒せるやれるやれるやれるやれるッ！　簡単だよな、颯火！」
「倒せる倒せるいけるいけるいけるいけるッ！　当たり前だ、葬屋！」
そう、声を張り上げながら、ひたすら紙人形を壊していく。バン、と最後の紙人形が壊れた時、二人は肩で息をしながら、にっと笑い合った。
「ナイス自己暗示、葬屋」
「っはは、お疲れ、颯火」

ぱちんと力なくハイタッチをする。紙人形はどうにかなった。後は逃げるだけだ！
「よぉ…し、これでどうにか、逃げ…」
「ほほう、こんなところに居たのか」
突然後ろから声がして勢い良く振り返ると、綺麗に切りそろえた髪と時代錯誤な和装が視界に映った。
「「でたぁあああッ！？」」
「でた、とは失礼だな。まぁ驚くのも無理はないな。ふふん、実はその紙人形は壊されるとその位置がこちらへ伝わるようになっているのだ。ご苦労だったな…って逃げるなこらぁあああッ！」
訊いてもないのに勝手に解説を始めるタームの手先、皐月の話など念仏を聞かされる馬よろしくな勢いでガンスルーし、二人は全力でダッシュ。
「なんとしても逃げてきってやるッ！」
「タームになんか入れられてたまるか！」
「逃走！」
「奔走！」
「往生際が悪いぞ、貴様等！　こら、待て！　は、早いからッ！」
必死な形相の二人は異様に足が速く、急いで追う皐月も流石に追いつくことが出来ない。伊達に阿部に遠方に飛ばされまくっていない。
「ああ、ぜぇ、くそう、私を…馬鹿にして…ッ！　鶯うううッ！」
皐月が相方の名前を叫ぶと、葬屋達がちょうど角を曲がったところに、無言の鶯が立っていた。
「「なんあう！」」
『なんでそこにいるんだ瞬間移動かどんなチートだよ！』と突っ込みを入れる途中で、鶯の無言の手刀が二人のみぞおちに炸裂した。
そして、間抜けな擬音を発しながら、二人の意識は闇に落ちていった。
ああ、これ、全部夢だったらいいのに、とぼんやり思いながら。

## Ⅵ

「……ああ、エリアNの35-408だ。大丈夫だ、私を誰だと思っている。ここから逃がすようなへまはしないさ……、ああ、ああ、わかった、待っているぞ」
町外れの廃墟。ひび割れた壁の向こうから日差しが差し込み、灰色のコンクリートをまだらに照らしていた。
そんな中、ぴ、と通話終了ボタンを押して、皐月は携帯を懐にしまった。その一部始終を無言のまま見つめる鶯、と銃を奪われ手足を縛られた馬鹿学生二人。
悪夢なわけがなかった。
紛れもなく現実だった。
間違いなく事実だった。
現実逃避、万歳！
「というわけだ。もうすぐターム行きの車が来るから辛抱しろ」
「何をだよ！　俺達からすれば、タームに行き事態が辛抱する対象なんだよ！」
「何だよ、校舎一つや二つくらい壊しただけで！　この扱いはないだろう！」
「校舎一つだと？　笑わせるな」
唯一自由な口を使って全力で抵抗する葬屋と颯火を、皐月はせせら笑った。
「記録によれば、貴様等が危害を加えたものは住居二十戸、信号機五個、これによる事故で車四十三台、校舎、船、屋台等々。宿舎は五十六回も修理したそうだが？」

「そうそう、おかげで俺達、寮使用禁止になったんだよな、颯火」
「遠いのに自宅通学しろっていうんだぜ？　酷いだろ」
「貴様等がな」
まったくだ。
というか、ここまで物を壊しておいて、今まで良く何もお達しが来なかったものだ。
「それに、先日の蒼慈・霜一の件と音斬の件で注目が集まってな。是非うちに引き抜きたい、という申し出があったわけだ。ゼペットから」
「「はァッ！？」」
そう、今回突然思い出したように二人へターム連行の届けが出たのは、ゼペットが二人のコンビネーションを愛しの悪言ちゃんの研究材料に出来ないものかと実力行使に出たのが全ての原因だったのであった。とはいえ、元はといえば、二人が校舎をぶっ壊して遠くに飛ばされてきたのがいけないわけだが。
自業自得。悪因悪果。
正直、無駄な抵抗をしているのが見苦しい。
「ま、そこで大人しく今までの愚行を悔いるんだな。残念ながら、どんなに願っても過ぎてしまった時は戻らないが」
そう皮肉げに言い放ち、皐月は二人に背を向ける。そこには二人から奪ったアサルトライフルと自動小銃が立てかけてある。流石の二人も銃さえなければただのアクティブな学生である。タームで鍛えられた皐月達の敵では…
「あれ？」
ないし。
自分に酔いしれていた皐月が目を開けると、確かに一瞬前までは柱に立てかけてあったはずの銃が忽然となくなっていた。
「ふむ、おかしいな。どこへ行ってしまったのだろう？」
その答えは、あっという間に出た。
ズダァン！
銃声が背後で聞こえた。反射的に振り向くと、先ほどまで口だけを達者に動かしていた二人が、皐月が奪ったはずの銃を構えて、悠然と立っていた。足元に手を縛っていた鎖が落ちている。
手足を縛られた状態から、皐月に気付かれず銃を取れるはずがない。
すなわち、言霊の力で奪われた銃を取り戻したのだ！
「さ、形勢逆転だな！」
「な、莫迦な…！　そんなこと、上級の言弾遣いにしか…ッ！」
勝ち誇ったように笑う颯火達に、愕然とする皐月。そう、手から離れたものを言霊だけで物質移動させるなど…、ただの言霊遣い見習いが出来る芸当ではない。おそらく、逃亡手段に使っていた空間移動を応用したのだろうが、それにしても…。
ただの阿呆学生が如何にして霜一と渡り合い、音斬に勝ったのか。それはきっとコンビネーションだけでなく、この機転と応用力なのだろう。
皐月は冷や汗が流れるのを感じながら、楽しげに笑った。
「は、面白い。いいだろう、貴様等がその気なら私たちも答えよう。お迎えが来るまでの間に私たちを倒してみろ！　もし勝ったなら、逃げるなりなんなりするがいい！　よもや、この期に及んで逃げるなんてことはしないだろうな？」
「当たり前だッ！」
「望むところだ！」
威勢良く答える二人。今までのように、二人力をあわせれば、乗り越えられる、そんな自信があった。二人は目配せをして、力強くうなずいた。
「ライティ《悪千喰頭》！　レフタ《被害網争》！　装填！」
「《降り注げ、千億の星々》ッ！」

「は、そんなもの、あたるものか！」
皐月は笑いながら、石灰石を取り出し、地面に《壁》と綺麗な楷書体で書いた。
轟、とコンクリートの壁が立ち上がるのと、引き金が引かれるのは同時だった。
バララララララッ！
銃声と、言弾がコンクリートを抉る音がまばらに響いた。
「な、お前、言霊は…ッ！？」
「は、言霊なんて時代遅れな媒介は使わんわ。私が使うのはその言霊を具現化したモノ、《文字》さ！　言ノ葉なんて曖昧なものより、ずっと明確で強力！　私は種も仕掛けもある記述師（マジシャン）なのだよ！」
言って、さつきは懐からと書かれた紙切れを取り出し、破り捨てた。すると、粉々に成った紙片が変形し人型をとり、葬屋たちを追っていた紙人形と同じ姿になった。
「やっぱ、そう簡単にはいかねぇな…」
「予想範囲内だろ？　大丈夫だ、俺達なら、きっと学校へ戻れる！」
「そう、だな！　いくぞ、葬屋」
言葉ＶＳ文字。
葬屋と颯火の運命をかけた、最後の戦い！
次々立ち上がる紙人形に皐月は満足げな笑みを浮かべながら、朗々と言った。
「さぁ、私の華麗なる記述（マジック）に酔いしれるが」
「うわぁあああああ、こっちくんな、イカレ野郎！」
「『はっ、残念ながら、お遊びはココまでだッ！』」
ドガシャバリーン！と、突如轟音とともに廃墟の壁がぶち抜かれた。
一同唖然とする中、砂埃の向こうから現れたのは見覚えのある双子。
というか、見覚えたくない双子だった。
「あ、さっちゃんとほけきょん！」「それに、葬屋に颯火も！」
「「ちーっす☆」」
「「音斬ぃいいいいいいいいッ！？」」
そう、歌って奏でるタームのハイテンツインこと音斬兄弟である。それに続いて現れたのは、瓦礫に埋もれてぐったりしている頼野琴樹に、その様子を恍惚とした表情で見下ろしている互井霜一（蒼慈）の姿であった。
言弾オールスター大集合！
そういうのは番外編でやってくれ。
「貴様等！　少しは空気を読んだらどうなんだ！」
「『ふん、文句ならコレに言うんだな。この毒づき野郎、キンディネスで存分に虐めてやったのに、ココに来る途中で性懲りもなく暴れだしてよォ。仕方なァく霜一さんが直々に扱いてやろうと思ってね』」
「くっそテメェ、死ね、死んじまえ、死にやがれ、死にさらせッ！」
「『あっはっは、もっと言えーっ！　もっと嘆けーっ！』」
「気持ち悪ィんだよ、こんのド変態ッ！」
琴樹は意地の悪い笑みを浮かべる霜一を憎憎しげに睨んで言い放った。どうやら、琴樹は互井と音斬の最凶コンビにボコられて、ココまでつれてこられたらしい。
「あ？　なんで、そんなことになってるんだ？」
「ふん、頭の廻らない奴だな。お前たちと同じ理由だよ」
邪魔が入ってすっかり不機嫌な皐月の言葉に、葬屋と颯火は二人で顔を見合わせた。
「つーことは、琴樹、手前も…」
「タームからお呼びがかかった、と」
「うっせぇ！　《も》って、お前等と一緒にすんなぁッ！」

ボロボロな状態で叫ぶ琴樹に、生暖かい同情の視線を送る二人。
あの互井と音斬のコンボとか、ご愁傷様です。
久しぶりの女の子かとおもったらただウザいだけの自過嬢と空気が相手だなんて、神に感謝しなければならなかったんだな。
「でも、何で？　こいつ、俺たちみたいに校舎ぶっこわしたりしてないだろ？」
『ゼペットが悪言マニアなのは知ってるだろ？　お前等のことを調べてる時に、キンディネスで大量に悪言を作ってたコイツに行き当たってな。是非ともタームに欲しいってことで、連行届けが出たって分け』
「だから俺達とそうちゃんズで」「ことちゃんを拉致ってきたのさ！」
またゼペットさんですか。
そんな我侭でいたいけな（若干有毒な）少年を強制的にターム送りに出来るとは、あの人、タームでどれだけ権力握ってるんだろう。
『で、皐月、車はまだなのか？』
「ああ、もう少しかかるそうだ。だから、暇つぶしにこいつらと手合わせしようとしていたのだよ。貴様等に出鼻を挫かれたがな！」
「えーッ！　何それおもしろそう！」「俺達も混ぜろよッ！」
「ふざけんな！　俺達はこの勝負に人生かけてんだよ！　つか、かかってんだよ！」
「さっさとこのパッツン倒して、こんな場所から逃げおおせたいんだよ！」
「そうちゃんズも一緒に混ざろうぜ！」
『そうだなァ、こいつらには若干借りがあるしィ？　また虐めてやろうかなァ！』
「聞けよ」
「つか、変態ドＭとトンチキギターとパッツンの四人がかりとか、勝てねぇよ」
「諦めるな、颯火！」「諦めたら其処でライブ終了だぞ！」
「俺たちのバンドも解散だぞ！？」
「組んでねぇよ」
相変わらず疲れるテンションのターム衆である。
ここで負けたらおはようからおやすみまでこのノリが待っているのだ。
ちょっと想像してみた。
「…無理無理！　絶対寿命縮むッ！　葬屋、《テーマコンボ》《悪態しりとり》！」
「あッ！」「始まった！」
説明しよう、テーマコンボとは以下省略。
大量の悪言を狩り、霜一を破り、音斬を倒してきたこの二人の十八番。
元々、一人では半人前の葬屋と颯火が、一番力を発揮できる技。
これで今回も乗り切ってみせる！
「いきがってんじゃねぇよ、ターム風税《が》！」
「我慢の限界だ！　俺達はただの学生だって何回言えば分かるんだ《よ》！」
「良く見てみろってんだ！　こんなことも分からねぇの《か》？」
「可愛そうにね。ま、こいつらはただの学生じゃなくて、阿呆学生だけ《ど》」
そう憎たらしく言ったのは、瓦礫にもたれている琴樹だった。
驚く二人の視線に、琴樹はふん、と鼻を鳴らして、
「…どうしてもって言うなら、協力してあげるよ。その代わり、絶対にこのイカレ野郎を蜂の巣にしろよな、この疫病神《め》！」
「…命令される筋合いはないが、一緒にこの場を乗り切ろう、琴樹！」
「は、束になったところで同じことよ！　音斬、互井！　奴等がもう暴れぬよう、好きなだけ暴れるがいい！」
皐月の大号令に、紙人形軍団と霜一、音斬兄弟が動き出す。
「おい、相手が霜一じゃァ、悪態は逆効果だろ、褒め殺しにしようぜ」
「いや、自過嬢の皐月とすぐ調子に乗る音斬が居るから、それもダメだろう」

癖のある四人が手を組んでいるのだ、ジャンル選びは慎重にしなければならない。
けなしもせず、褒めもせず。間を取る言弾。
すると…つまりは…
「よし、仕切りなおしだ、颯火、琴樹！　《ツンデレしりとり》！」
ツンデレ。
心中では慕っているのに、素直になれずつんけんしてしまうという複雑な心理状況下にある者を指す言葉。即ち、けなしつつ持ち上げる。正と負、二つの要素を持ち合わせた、最強の言弾なのだ！
実際にやってみた。
「べ、別にお前のことが好きなわけじゃ、な、ないんだから《な》ッ！」
「何言ってんだっ！　勘違いすんなよ！　お前のためにやったんじゃな《い》！」
「い、いきなりなんだよ！　う、うるさい！　あっちい《け》！」
「結構だっ！　君の助言なんて、僕には必要ない《さ》」
「寂しくなんか…ねぇよ…、別に、お前が居なくなっ《て》…ッ！」
「手前には関係ないだろッ！　お、俺がどう思っていようが、俺の勝手だ《ろ》！」
ダダダダダダダダダダダッ！
テンポ良く進むしりとりに合わせて、徐々に威力を増す言弾は、皐月の紙人形を容赦なく切り裂いていく。
ツンデレは世界を救うって、誰かが言っていたが本当かもしれない。
霜一はすっかりダウン。蒼慈も肩で息をしながら、苦しげに言った。
「な、なんなんですか、あの言霊…っ！　兄さん、し、しっかりして！」
「く…っ、私達があんな奴らに押されているだなんて…！　音斬なんとかしろ！」
「あのしりとりを打ち消せばいいんだな？」「それくらいお茶の子さいさい！」
そう言って、音斬兄弟は同時にギターを構えた。アップテンポに奏で始めたのは『蛍の光』のバンドアレンジ。
「♪兄貴は戦地へ　父は死地へ
　姉は毒飲み　母は眠る
　赤子は既に　土くれに
　嘆けぞ　今朝は別れ逝く」
そしてギュイーン！と同時にギターをかき鳴らした。途端、
「うわァアアああアアアぁぁアァあああぁアアあああぁあぁあああアアアァあッッ！」
そう叫んだのは琴樹だった。
「うわぁあ何で僕がこんなことにしなきゃいけないんだッ！　僕はリンのことが好きだっただけなのに、この馬鹿言弾遣いが来た所為でターム送りだよッ！　ふざけるな！　僕はタームなんて、へんてこ野郎の溜まり場、リンの居ないところじゃ生きていく気がしない！　死ぬ！　こいつらが死なないなら僕が死ぬうううッ！」
「お、おい、琴樹、どうした！？　悪態はダメだってッ！」
「五月蝿い黙れぇえッ！　もとはと言えばお前の所為なんだよッ！」
叫びながら、琴樹は苦しげに頭を抱えている。まるで、何かに突き動かされ、無理やり悪態をつかされているようだった。
「「見たか！　歌武器者の力！」」
「な、音斬…！　まさか、さっきの歌が…っ！」
「ご名答！」「ことのんの悪口は一人で悪言を生み出しちゃうくらいだからね！」
「「そうちゃんズのために、操ってみました！」」
なんとでもないようにいう音斬。忘れてはいけないのだ、この一見馬鹿で頭足りない系の双子もタームの一員。侮ってはいけないのだ。

「ふふん、俺達ってばすごいだろ！」「なかなか気がつくだろ！」
「『さっちゃん！　褒めて、褒めて！』」
「褒める前に聞いていいか。お前達、何歳だ？」
こんなんだけど。
「『こっちそーさまっ☆』」
そういう間に、ツンデレのデレの部分でノックダウン中だった霜一は充電完了。満ち足りた顔で手を合わせて、口の端をゆがめた。
「『さァて、どうやって虐めてやろうかなッ！』」
「『しまったぁあああああ！』」
霜一様、再☆臨。
邪悪な笑みを浮かべたまま、絶叫する二人に襲い掛かる。いつの間にか袖口から取り出していたナイフが颯火の頬を掠めた。
「こ、殺す気かよッ！」
「『あはは、殺しはしないさ殺しは。虐めるだ、けッ！』」
そう笑いながら放たれたナイフを寸でのところで避ける。基本的に銃器を扱う長距離タイプの二人に、接近戦は不利だった。しかも、せっかく仲間になった琴樹は霜一のエネルギー源になってしまうし、しりとりも流れてしまった。
打つ手なし。
しかし、二人の武器は応用と、機転！
「『ふん、逃げ回るなんて見苦しいね！　お前等、《止ま》』」
バララララララララララ！
霜一の言葉を聞き終わる前に、二人は同時に引き金を引いた。力強い銃声が、霜一の言霊を掻き消した。葬屋たちの動きが止まることは、ない。
「あー、何を言ってんだかワカリマセーン！」
「もう、それは通じネェンだよッ！」
霜一の命令は具体的に言うと相手が強制的にそれに答えるというもの。すなわち、声が通らなければ命令も通らない。そのため、霜一の台詞を途中から銃声で掻き消したのだった。
「前回のようにみすみす言霊を喰らってやるかよ！」
「『は！　そうでなくっちゃ！　あん時の落とし前、つけさせてもらうぜ！』」
「望むところｄ」
「貴様等ぁあああ！　私を放置するなぁあああっ！」
と、霜一対葬屋と颯火の熱いリベンジマッチが始まろうというところで、今回の新キャラであるところの皐月さんがキレた。
そういえば、なんか空気でしたね。
「貴様等！　何度言えば分かる！　これは、私の戦いだと言っただろう！　貴様等はあくまでも私のサポート！　前に会ったことがあるからって、仲良くしてるんじゃないよ！　目立ち過ぎ！　私の影が薄くなるだろうが！」
「『つか皐月って確かに面白い言霊遣うけど、普通の言弾とあんま変わらないよな』」
「な…ッ！？」
あ、それ、地雷。
「な、なな…何を言うか！　私の素晴らしいな記述は言弾なんかとはまるでまったく大違いなのだ！　心外だ！　くそォ、もういいもういいよーだ！　貴様等なんか知らないわッ！　さっさとふんじばってターム行きにしてやるッ！」
地団太を踏みながらまさにぷんぷんという擬音がつきそうな皐月。さっきまでの、どこか余裕（というか、良く分からない自信）に満ち溢れた表情は何処へ、音斬の頭

とためはれそうなくらいの精神年齢になっている。
タームは頭アンチエイジング計画でも進めてるんですか？
「てめ、霜一！　お前の所為であっちが本気出してきたじゃねぇかよ！」
『当たり前だろう、怒らせたんだから』
「確信犯かよ！？」
「ふざけんなよ！」
『あっはっは、もっと罵っていいぞ！』
「死ねよ、変態！」
「消えろ、ドＳ！」
今更ながら、ドＳなのに罵ると回復するって反則だと思う。
「コラ！　私を放置するなといっただろうが！　私が参加していない会話を十秒以上続けるな！　私以外に喋るな！　うわぁあん！」
「お前、そんなことしたらこの物語が破滅するぞ」
「あーあーッ！　鶯！　さっさと始めてくれ！」
駄々っ子のようにぎゃんぎゃん吠える皐月の声にこたえるように、皐月より空気、というか背景と化していた鶯が、闇から湧き上がるように現れた。
とっさに銃を身構える葬屋と颯火を、鶯は感情の無い目で一瞥すると、硬く閉じられていた口をゆっくりとひらいた。
「……、黙秘剣、行使する」
鶯の呟きとともに、斬、と銀の刀身が空を斬ると、辺りはシンと静まり返った。
銃の引き金は、引かれているのに。
「あ、どうなってんだ？　弾がでねぇ…ッ！？」
「黙秘する」
鶯は短く言い放って、地面を蹴って一気に二人との距離を詰める。反撃しようと引き金を引いても、カチカチと虚しく小さな音を立てるばかりである。
「くっそ！　何なんだよこれ！」
「はは、すごいだろう！　鶯の黙秘剣は！　鶯はいつも感情を殺している。だから、言霊が心に響かない、つまり、鶯には影響しないのだ！　それゆえ、鶯が期を流し込むその刀は、全ての言霊を無効化することが出来る！　さっさとくたばるがいい！」
自分のことでもないのに得意げにいう皐月は、懐からまた紙切れを取り出し、紙人形を増やす。無表情のまま刀を振りかざす鶯に、颯火は銃をしまい、足元に落ちていた鉄パイプで対抗するも、完全におされている。その後方からは即席紙人形軍団。
八方塞。
なんか、そんな絶望的な単語が浮かんだ。
何、このチートキャラ？
「言弾使いから言霊をとるとか！　お前それでも人間かッ！」
「あっはっは、何とでも言うがいいさ！」
「平原真っ平ら！」
「この断崖絶壁！」
「なんの話だ貴様等」
そう軽口を叩く間も、鶯の刀は止まらない。銃も、ただの鉄の塊と化している。
言弾が、言霊が使えないという状況。
さきほどの紙人形迎撃の時とはまた違う。言霊がいっさい使えない状況。
「いったいどうしたら…っ！」
寸でのところで鶯の刀を避けながら、葬屋は考える。
二人がただの学生と一線を画している部分。コンビネーション、応用、そして、

機転。
葬屋はひとつ結論にたどり着いたのか、潜めていた眉を元に戻し、必死に鉄パイプで刀を弾く颯火の背中に声をかけた。
「……もう無理だ、颯火」
「…？　どうした、葬屋」
「こんなチートキャラ、流石に相手に出来る分けない。俺達はただの学生だぜ？」
「…お、おい、どうしたんだよ！　葬屋！　そんなこと言うなって！」
「だから、颯火、お前だけは、逃げろ」
「？！」

途端、葬屋は颯火の前に飛び出して、
鶯は銀に輝く刀を振り下ろした。
紅い、しぶきが上がった。

「――――――っっ！？！！」
斬という音とともに、葬屋はゆっくりと崩れ落ちた。白いワイシャツに、じわりと紅いしみが浮き出し始めた。表情も苦しげに歪んでいた。
何が起こったのか、怒っているのか、分からなかった。
ただ一つだけ言えるのは、
斬られた、葬屋が。
「！！」「！？」
『何だァ？』
「そ、葬屋ぁあ！？」
情けない声をあげて、急いで駆け寄る颯火。已然にも似たようなことはあったが、そのときとは比べ物にならないくらい傷が深い。
「う、鶯！　傷つけるな、とあれほど！」
「……違う、」
信じられない、というように首を振る鶯。無表情の裏に激情が渦巻いているのが見えるようであった。刀を握る手も、震えていた。
「葬屋！　なぁ、葬屋！　お前…、何を…っ！」
「……俺には、もう、無理なんだ…、っごめんな……」
思ったより出血が酷いのか、葬屋の顔色が見る見る青ざめていく。今まで、考えようとして、しかし、どこかで大丈夫だろうと思っていたことが、起こってしまった。
それは、傷つくということ。
どちらか一方が、失われる、ということだった。
今は叫びの言霊も使えない。
ただ、ワイシャツが紅く染まっていくのをただ見ていることしか出来ないのだ。
颯火は紅く染まった葬屋の手をとった。
「何言ってんだよ！　俺達はいつでも一緒にやってきただろ！　それなら何でも出来るって、ずっと言ってたじゃねぇか…ッ！」
「……勝てないものは、勝てないんだ…」
「ダメだって、そんなこと……ッ！」
「とりあえず、お前は、早く、逃……」
こぉ、と空気が抜けるように息を吐いて、葬屋は口を閉じた。
「に…げれるわけ……ないだろう…ッ！　逃げてるのは手前の方だろう！」
言い放って、颯火は呆然と立ち尽くす鶯を憎憎しげに睨んだ。
「鶯……、手前の所為だ」
「……っ！」

「タームの奴らはどこか狂ってるけど、それでもむやみに人を傷つけたりしないものだと思っていた。でも、違うんだな。俺達は、場数は踏んでるが、ただの学生、一般人なんだ。それなのに、無表情で斬りかかれるなんて、流石タームだよな…！」

「……、」

いつものように、勢いに任せて言うのではない、静かな憎しみ。

琴樹がリンとともにありたいように、

蒼慈が亡き霜一を異魂としてよみがえらせたように、

音斬兄弟が同一を求めるように、

颯火と葬屋は二人で一つ。ここまでやってこれたのは、二人でいたからなのだ。きっと、一人だったら、悪言の大群すら、乗り越えることは出来なかっただろう。

その片割れが深手を負い、倒れている。

このまま失血が続けば、死に至るかもしれない。

「何か言ってみろよ！　おい！　何か…ッ」

言う間に、颯火の涙腺が緩み、大粒の涙がこぼれた。ワイシャツの上を、赤と混じって、流れていく。

「……勘弁してくれよぉ…、手前がいなくなってどうすんだよ…ッ！　ふざけんな…」

静かな沈黙が、廃墟内に下りた。いつもは騒がしい音斬も互井も皐月も琴樹も、今はじっと事の成り行きを見守っていた。

「……ば、か、な……俺、は……斬ってなんか…そんな……ッ！」

鶯はそう、震えながらうわごとのように呟いて、カラリ、と刀を取り落とした。

のと、葬屋のライフルの銃口が鶯に向けられるのは同時だった。

**「なーんちゃってッ！」**

バララララララララララ！

驚く間もなく、鶯は銃声とともに鶯は向かいの壁まで吹き飛ばされる。

あれ、葬屋って、さっき倒れていた方だよな？

颯火じゃないよな？

あれッ！？

「……っ！？」

「《テーマコンボ》《悲劇》」

ブレザーについた砂を払いながら、葬屋は言った。

「悪いけど、全部演技だ。血も、そこにおいてあったペンキを拝借しただけだ」

「黙秘剣は心を殺していなければ使えないんだろ？　なら、俺達の全米が泣いた的友情ストーリーで心を動かしてやればいいって話だ」

「なんだと！？　つまり、今までの流れは…」

「「全部演技だ！」」

そう、あの作者突然どうした的な流は、いつかの『ヨレイヌ―ッ！』と同じ、ただの寸劇だったのだ！

ほら、良く見ると、台詞がしりとりになっている。

それにしても、打ち合わせもなくここまで迫真の演技ができるとは、それこそまさに、幼馴染パワーとでも言うのだろうか。

二人はしたり顔で、主人の手元から離れた刀を取り上げた。

「さぁ、これで黙秘剣は使えないだろう！」

「今度こそ、本気で勝負だ！　そうしたら、俺たちのことを解放し」

「柏さん、遅れました～！　護送班、到着しました～！」

なんか、今、すごく不吉な台詞が割ってはいってこなかったか？
「おお、ご苦労。対象はあそこの格好つけてる馬鹿二人と、瓦礫に埋もれてる奴だ」
「はいは～い！　しっかりタームに連れて行っておきますよ～」
「ああ、よろしく頼んだぞ」
ぎこちない動作で振り返ると、其処には大きな護送用車両が止まっていた。
二人の時間も、完全に止まっていた。
「……タイム、アウト」
ぽつりと、鶯が呟いた。
「あ、え、ああ、あの、俺達、あの、黙秘剣、倒し…」
「言ったじゃないか、お迎えが来るまでだってな」
「いや、待て、ちょっと、そんなのって」
「ふん、私のことを無視して、変なのとじゃれあっているからいけないんだ」
霜一達の乱入ですっかり忘れていた。そういえば、時間制限があったんだ。
バッカジャネーノ！
「というわけで、大人しく諦めろ、この糞餓鬼ども」
と、突然背後から聞き慣れた声がした。振り返ると其処には、見慣れた強面の男。
「うわあぁあああああ阿部ぇえええあああああッ！」
「五月蝿ぇ耳元で叫ぶな！」
そう、葬屋と颯火を学校から追い払った張本人、阿鼻叫喚こと、阿部猛だった。
「何でこんなところに！？」
「あ、もしかして、俺たちのことを連れ戻しに来てくれたのか！」
「んなわけあるか」
一抹の希望も一蹴され、ふと気を抜いた途端、銃を取り上げられた。
「むしろ、俺はお前たちが護送されるのを手伝いに来たんだよ。まぁた無駄に暴れるだろうとおもってな。…あ、この銃どっか別の場所に厳重に保管しとけ」
「えええええええッ！？」
自分の生徒がターム送りにされるというのに、なんだこの教師！
でも、まぁ、当然の反応ではあった。
「往生際が悪いんだよ。そもそも、手前らの所為だろ。何も言うことなし」
デスヨネーッ！
「『あっはっは、あそこまで戦っておいてオチがこれかよ！　お前ららしいといっちゃらしいなぁ！　やば、超間抜け～ッ！（嘲笑）』」
「わーい！　これで毎日！」「やっちゃんかっちゃんと遊べるぞー！」
「うきうき！」「わくわく！」
騒ぎ立てるターム衆の声もどこか遠い。ツッコむ気力も残っていない。
「……葬屋、俺達、生きていけるよな」
「……ああ、きっと二人ならな、颯火」
「これからもよろしく頼むぜ、親友！」
「ああ！　めげずに行こうぜ、相棒！」
そう、言って、お互い顔を見合わせ、力の限り叫んだ。
「「って、やってられるかぁあああアアアああァアッ！」」
「…黙れ」
ボグゥ、と鶯の手刀の痛みを最後に、二人の旅は終わるのだった。色んな意味で。
しかし、これは、この後も続いていく、物語。
終わりなど、来ない。

**次回、言弾シリーズ第2シーズン、ターム編！　あるかどうかはお楽しみ！**

《END…less》